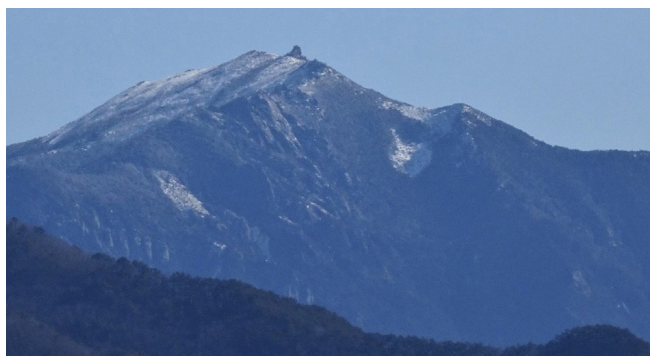




『国志』に言う甲斐国側の九ルートとは、杣口・西保・万力（以上を東口という）、塚原・吉沢・亀沢（以上が南口）、穂坂・江草・小尾（以上が西口）などの諸村を起点あるいは通過します。なお実際には若神子から茅ヶ岳西麓を通過する主要な浅尾ルートもあります。山頂の奥宮（山宮）に対して、各御嶽道の麓には金櫻神社や金峰神社などの里宮が建てられました。甲府市御岳町にある御嶽金櫻神社もその一つ。鎌倉後期には本殿が建設され、以後室町・戦国・江戸期を通して隆盛したことが伝わります（斎藤1987）。吉沢ルート上には鎌倉期の石鳥居（現在県指定建造物）がありました。また御嶽道の一つでもある「杣口ルート」に面した旧牧丘町金櫻神社奥社地遺跡の発掘調査では、平安後期から鎌倉初期には社寺が建設され、以後盛衰の波はあるものの江戸中期には一部再整

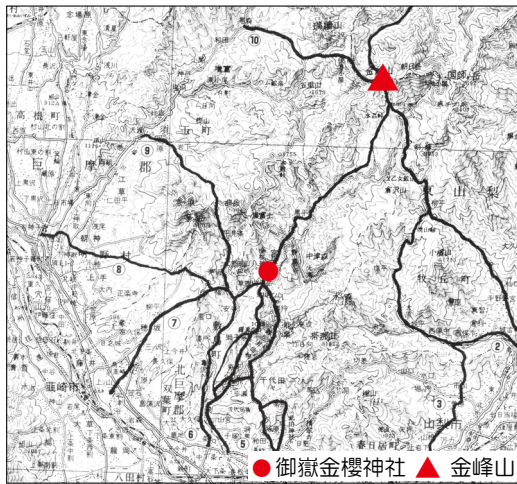


図2 御嶽道の各ルート（櫛原 2006 に加筆）

備がなされたことが確認されています（櫛原2006）。

### 3 各ルートの特徴的な石造物・道標など

江草ルート：鳥居峠役行者像（宝暦13/1763）写真2

大峠下延命地藏（文政5/1822）写真3

浅尾ルート：浅尾新田道標（元禄15/1702）写真4

北杜市教育委員会保管

大蔵新田供養塔道標（寛政4/1792）写真5

亀沢ルート：島上条道標（享保2/1717）写真6

甲斐市教育委員会保管

吉沢ルート：一の鳥居（鎌倉時代）写真7

杣口ルート：金櫻神社奥社地遺跡（平安～江戸）写真8

### 4 まとめと課題

金峰山信仰の年代や御嶽道各ルートの時代について、出土品や道標から確認できたことをまとめてみます。

【山頂】平安後半期から信仰の対象となった可能性がある～灰釉陶器・経筒容器・土製の馬・金属製など

【杣口金櫻神社】10世紀前半の土器出土。平安末から鎌倉初期には社寺建設される。以後盛衰繰り返すが江戸中期頃一部再整備される。

【御嶽金櫻神社】平安後期の遺物あり。鎌倉時代後期には本殿建設。以後戦国・江戸時代を経て隆盛するが昭和30年火災で焼失。

【各御岳道道標】元禄15年（1702）年銘（浅尾ルート）、享保2年（1717）年銘（亀沢ルート）を古段階として宝暦年間以降嘉永年間（1751～1854）に増加する傾向がある。

以上のように金峰山信仰は平安時代に修行者・修験者によりはじめられ、鎌倉時代には杣口や御嶽に金櫻神社が建てられ発展しました。その後、民衆訴訟の裁決に神の力を借りるために鐘を衝くといった考えのもと（「御嶽の鐘・誓詞の鐘・秘訣の鐘ともいう」）、御嶽に参詣する戦国期から江戸前期の記録も残っています（笹本1996）。そのような利用が廃れても江戸時代中期には各ルートが再整備され、さらに後期から幕末には道標が増加していった傾向がわかります。とり

もなおさず各方面からの参詣者が増加したことを意味します。この時期は富士講も盛んになっており、信仰の広がりとともに経済状況の発達も含めた社会背景を考える必要があります。

このように、金峰山信仰は日本を代表する山岳信仰の一つと言えます。

引用・参考文献

櫛原功一2006『杣口金櫻神社奥社地遺跡』山梨市教育委員会

小柳義男1983「甲斐・金峰山頂出土の修験道関連遺物」

『長野県考古学会誌』47

斎藤典男1987『御嶽道』山梨県歴史の道調査報告書12

笹本正治1996『武田氏と御岳の鐘』山日ライブラリー

信藤祐二1998「甲斐金峰山」『季刊考古学』63 雄山閣出版



写真2 鳥居峠役行者像



写真3 大峠下延命地藏



写真4 浅尾新田道標  
（これよりみだけみち）



写真5 大蔵新田供養塔道標



写真6 島上条道標  
（是より北みだけみち）



写真7 吉沢ルート一の鳥居



写真8 杣口金櫻神社奥社地遺跡

（新津 健）



## 甲府盆地に広く分布している火砕流 ～ 火砕流は富士山だけではない ～

### はじめに

富士山が世界文化遺産に登録されてから、昨年(2023年)6月で10周年の節目を迎えました。この10年のうち、一昨年までの3年間は新型コロナ感染の影響もあって富士山への訪問者は減少傾向でしたが、2023年の夏には再び以前のように多くの訪問者が戻ってきました。そして今年(2024年)の富士山は多すぎる観光客(オーバーツーリズム)への対策が話題になっています。このように富士山には国の内外から多くの観光客・登山者が訪れる一方で、活火山の山であることに変わりはありません。いずれ噴火することは確かな山として、多くの専門家が認めています。そのため富士山の噴火に備えた対策について、さまざまに検討されてきており、想定されている噴火現象の中で噴火後の流動スピードが大きいことから特に注意が必要とされる、火砕流を今回の話題に取りあげてみました。

ここで火砕流を含む火山現象について簡単に整理しますと、一般に火山からマグマなどが火口から噴出した際に、固体として高く遠くまで飛ばされるのが火山灰、噴石、火山礫などと呼ばれるものです。一方で、火山の近くにおいて山体表層付近を流れ下るのが溶岩や火砕流です(図1)。

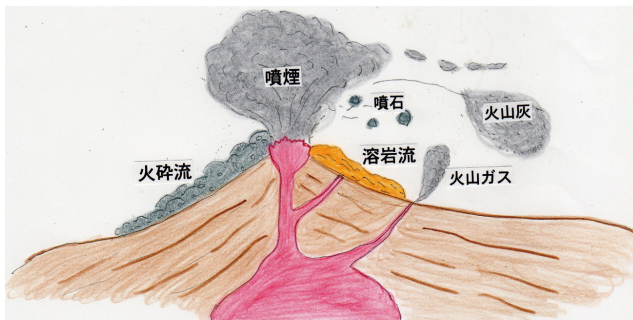


図1 火山活動の仕組み

### 1 富士山のハザードマップ

富士山は2000年から2001年にわたって、富士山直下において低周波地震が活発化しました。これを契機に富士山が活火山(=概ね過去1万年以内に噴火した火山及び現在活発な噴気活動のある火山)であることが広く再認識されました。その後、最近までニュースになるような低周波地震の兆しは認められていないようです。一方で、2000年頃に低周波地震の活発な動きを示したことがきっかけとなって、富士山の火山災害を軽減する機運が高まり、富士山の過去の噴火記録など地質学的データを基に、また富士山以外の幾つかのハザードマップの具体例を参考にして2004年6月には富士山の噴火対策として初のハザードマップが作成されまし

た。このマップを基に、2005年には避難方法や広域避難に際しての協力体制等に関して、山梨県のみならず静岡県側も含めた連携による「環富士山火山防災連絡会」が発足しました。このように、一時の低周波地震の活発化の騒動をきっかけにして、富士山麓一帯に住む者を中心に、安心して生活できる対策が強化されるようになりました。そして、このハザードマップは2021年3月にさらに改定・修正がなされ今日に至っています。

富士山のハザードマップでは、想定される噴火口の範囲をはじめ、溶岩流・噴石・降灰・火砕流・融雪型火山泥流などが取り上げられ噴火対策の情報が示されています。この中で火砕流については、前述したとおりその流動スピードが大きいことから噴火の際には特に注意を要するものとされています。

### 2 火砕流とは

そもそも火砕流とは、火山現象のひとつで気体(火山ガス・空気)と火山灰・軽石・火山岩片など固体からなる土砂移動現象です。数百℃以上の高温の火山ガスと固体が混合一体化しており、液体を含まないため地面との摩擦が少なく、そのために、ときに時速100kmを超える高速で地表面を流下することが火砕流現象の特徴として知られています。この火砕流の知名度が上がるきっかけは、1991年6月の長崎県・雲仙普賢岳の噴火であり、この時には死者・行方不明者は計44名を数える大災害でした。

### 3 甲府盆地側に分布する火砕流

火砕流は火山活動の一つですが、富士山のようにその活動歴が活火山として定義される時代(約1万年前)よりもさらにさかのぼってみますと、実は甲府盆地側には今から百万年前頃にあるいはさらに古い時代に活動した痕跡が広く認められます。その一例が昇仙峡周辺に知られています。昇仙峡と言えば即座に花崗岩(=御影(みかげ)石)をイメージされる方が多いかも知れませんが、昇仙峡周辺は花崗岩以外に、実は今回の話題として採り上げた火砕流が広く分布している地域でもあります。

昇仙峡ロープウェイの直ぐ北には金峰山の里宮の金櫻神社が位置し、この神社の手前から甲斐市や韮崎市方面に至る、県道沿いに典型的な火砕流が容易に観察できます(写真1)。火砕流の分布は車が走る道路沿いだけではありません。初詣などに多くの人が訪れる金櫻神社の境内でも観察できます(写真2)。本宮・境内からその背後の裏山に通じる斜面への登り口・通路沿いにも火砕流が分布しており、最近では火砕流の説明用の看板も設置されています(写真3)。





写真1 金櫻神社付近の県道沿いに観察できる火砕流堆積物



写真2 金櫻神社の境内


写真3 金櫻神社の火砕流の説明看板  
（境内から裏山への通路沿い）

この看板の奥に（東に）数メートル進むと、その斜面には典型的な火砕流を観察することができます（写真4）。このように昇仙峡地域で観察できる火砕流は、今から百万年程前の昔にこの場所から北へ約3kmに位置する黒富士火山から噴出したもので、黒富士火砕流などと呼ばれてもいます。その分布は甲府市北部の昇仙峡地域や敷島町のみならず甲府盆地の南縁にそびえる御坂山系の麓まで、甲府盆地一帯に広範に認められています。



写真4 金櫻神社に分布する火砕流（丸太の右側の灰色斜面壁）

#### 4 最後に

富士山をはじめとする活火山が、日本列島には現在のところ111が数えられ、これらはいずれ噴火するものと考えられています。一方で、日本列島には過去にさかのぼって1万年間あるいはそれ以上の長期にわたって噴火活動の記録がない火山は、現在知られている活火山を遥かに超える数になります。

このような今後に噴火の心配のない火山について、今回は甲府盆地側において今から100万年前頃に活動した火砕流が昇仙峡の金櫻神社付近で観察できることを紹介しました。甲府盆地側には、100万年前よりも更に古い時代に遡った過去にも、火砕流の具体例として、山梨市の寺院（永昌院）の周辺にその分布を観察することができます（写真5）。火砕流は、山梨県内を見渡しても富士山に限られた火山現象ということではありません。



写真5 山梨市の永昌院周辺に分布する火砕流

（奥水 達司）